福童石橋遺跡

小郡市文化財調査報告書第３６２集

小郡市教育委員会

福童石橋遺跡

―福岡県小郡市福童所在遺跡の調査報告―

小郡市文化財調査報告書　第 362 集

2024

小郡市教育委員会

序

小郡市は近年地理的環境を背景に、ベットタウンや工業団地をはじめとするさまざまな開発により発展を続けています。それに伴い流通倉庫の建設が相次いで行われています。

今回報告する福童石橋遺跡は今回が初めての調査であり、大きな成果を上げることができました。近世の溝を多数検出し、人々がこの地を田畑として利用してきた痕跡を確認しました。またこの地域は水害に悩まされる地域であり、人々の水の管理の結晶を生々しく感じることができました。本書が当時の人々の生活と文化を現在の私たちに伝えることができれば幸いです。

最後に、現地発掘調査にご理解とご協力をいただいた周辺住民の皆様、そして現地作業にあたった地元作業員の皆様など、発掘調査を進める際にお世話になった多くの方々に感謝を申し上げ、序文といたします。

令和６年３月31日

小郡市教育委員会
教育長　秋永晃生

例言

1、本書は、福岡県小郡市福童字石橋に所在する福童石橋遺跡１区の発掘調査報告書である。

2、発掘調査は株式会社アイチ．代表取締役葛城亮氏から委託を受け、小郡市教育委員会が実施した。

3、調査期間は、令和５年１月 26 日から令和５年３月 31 日まで実施した。調査面積は 5,320 ㎡である。

4、遺構の実測は調査担当者と柏原孝俊、平田太輝（別府大学学生）、仲田美乃里（福岡大学学生）、服部美紀（福岡大学学生）、遺物実測は調査担当者が行い、遺物トレースは林知恵、遺構デジタルトレースは宮崎美穂子が行った。遺物の洗浄・接合は佐々木智子、永富加奈子、牛原真弓、佐藤優子、久佐木美樹が行った。

5、遺構配置図の実測は（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

6、遺構の写真撮影は調査担当者、遺跡の空撮は（有）空中写真企画、遺物の写真は（有）システム・レコが行った。

7、本書で使用する遺構の略号として以下を用いて表示している

SK：　土坑　SD　：　溝　SF：　道路状遺構

8、遺物・実測図・写真は小郡市埋蔵文化財調査センターにて保管・管理している。広く活用されることを期待する。

9、本書の執筆・編集は高橋が行った。

目次

第１章　調査の経過と組織…… 1
　1、 調査に至る経緯
　2、 調査の経過
　3、 調査組織

第２章　位置と環境 …… 2･3
　1､地理的環境
　2､歴史的環境

第３章　福童石橋遺跡の遺構と遺物 …… 4～26
　1、 遺跡の概要
　2、 遺構と遺物
　　(1) 土坑
　　(2) 道路状遺構
　　(3) 溝

第４章　調査の成果 …… 27･28

挿図目次

第１図　福童石橋遺跡　調査地位置図(S=1/4,000) …… 2
第２図　周辺遺跡分布図(S=1/50,000) …… 3
第３図　1～3号土坑　実測図(S=1/40) …… 5
第４図　4～7号土坑　実測図(S=1/40) …… 6
第５図　8号土坑　実測図(S=1/40) …… 8
第６図　9･10号土坑　実測図(S=1/40) …… 9
第７図　11号土坑　実測図(S=1/40) …… 10
第８図　12号土坑　実測図(S=1/40) …… 11
第９図　1号道路状遺構　実測図(S=1/80) …… 13
第10図　1号道路状遺構　土層図(S=1/40) …… 14
第11図　1号道路状遺構　土層模式図(S=1/40) …… 15
第12図　2･3･4号溝　土層図①(S=1/40) …… 17
第13図　2･3･4号溝　土層図②(S=1/40) …… 18
第14図　3･5･6･7･8･14号溝　土層図(S=1/40) …… 19
第15図　8･18号溝、7･19･20号溝　土層図(S=1/40) …… 22
第16図　15･18･21･24号溝　土層図(S=1/40) …… 23
第17図　1･8号土坑、1･2･3･4･7･8･10･15･16･18号溝　出土遺物実測図(S=1/4) …… 25
第18図　3･7･19･25号溝、1号道路状遺構　出土遺物実測図(S=1/4、※:S=1/2) …… 26
第19図　福童石橋遺跡　地籍図　合成図(S=1/1,000) …… 28

表目次

表１　福童石橋遺跡　出土遺物　観察表 …… 29･30

付図

福童石橋遺跡　遺構配置図(S=1/200)

図版目次

図版 1
①調査区全景(上空から)　②調査区上空から秋光川を臨む(上空から)

図版 2
①8号溝全景(上空から)　②1号土坑　土層断面
③2号溝土層断面　④1号土坑　完掘
⑤2号土坑　完掘

図版 3
①1・2号土坑　完掘　②3号土坑　土層断面・完掘
③4号土坑　土層断面　④4号土坑　完掘
⑤5号土坑　完掘　⑥6号土坑　完掘
⑦7号土坑　土層断面　⑧7号土坑　完掘

図版 4
①4・5・6・7号土坑　完掘　②8号土坑　土層断面
③8号土坑　完掘　④9号土坑　土層断面
⑤9号土坑　完掘　⑥10号土坑　土層断面
⑦10号土坑　完掘　⑧11号土坑　土層断面

図版 5
①11号土坑　完掘　②12号土坑　土層断面・完掘
③1号道路状遺構　南壁土層断面　④1号道路状遺構　北壁土層断面
⑤1号道路状遺構　完掘　⑥1号溝　完掘
⑦2・3・4号溝土層(b-b')　⑧2・3・4号溝土層(c-c')

図版 6
①2・3・4号溝土層①　②2・3・4号溝土層②
③2・3・4号溝土層(d-d')　④2・3・4号溝　完掘
⑤8号溝　土層(g-g')　⑥8号溝　土層(l-l')
⑦8号溝　土層(SD8a-a')　⑧8・18号溝　土層(SD8c-c')

図版 7
①8・18号溝　土層(SD8・18b-b')　②8号溝　北東角　完掘
③8号溝　南　完掘　④10・12・13号溝　完掘
⑤14号溝　土層(m-m')　⑥15号溝　土層(n-n')

⑦15号溝　完掘

図版 8
①18号溝　土層(o-o')
③19・20号溝　完掘
⑤24号溝　完掘(q-q')
⑦25号溝　完掘

図版 9
出土遺物①

図版 10
出土遺物②

図版 11
出土遺物③

図版 12
出土遺物④

図版 13
出土遺物⑤

図版 14
出土遺物⑥

図版 15
出土遺物⑦

⑧作業風景

②19・20号溝　土層(SD19・20a-a')
④21号溝　土層(p-p')
⑥21・24号溝　完掘
⑧作業風景

第１章　調査の経過と組織

1、調査に至る経緯

小郡市福童は西側に佐賀県鳥栖市と隣接しており、鳥栖インターチェンジにも非常に近い場所に位置している。その地の利を生かし最近では流通倉庫の建設が多い地域である。

本遺跡の調査は、周知の埋蔵文化財包蔵地福童石橋遺跡地内（小郡市福童 200 他 15 筆）が流通倉庫建設の対象地となり、令和３年 12 月８日付で株式会社アイチ . 代表取締役葛城亮氏より埋蔵文化財の有無に関する照会（事前審査番号 21126）が提出されたことに始まる。これを受け、小郡市教育員会文化財課で対象地の一部で試掘調査を行った。結果、弥生時代の遺構・遺物が確認され遺跡の存在が認められたため、発掘調査による記録保存が必要な旨の回答を行った。その後、施工業者と小郡市教育委員会文化財課で協議し、令和４年度事業として発掘調査を実施し、令和５年度に発掘調査報告書を刊行することで同意を得た。

2、調査の経過

発掘調査は令和５年１月 26 日から３月 31 日にかけて実施した。以下、調査の経過を調査日誌から抜粋する。

10/25	現場にて開発業者と打ち合わせを行う
１/26～	表土剥ぎを開始する
２/９～	作業員を投入して遺構掘削を開始する　表土剥ぎも同時進行で行う
３/７～	(株)埋蔵文化財サポートシステムにより全体図の測量を開始する
３/24	空撮を行う
３/27～３/30	埋め戻しを行う
３/31	現場の引き渡しを行う

3、調査組織

〔令和４年度　調査　令和５年度　整理作業〕

小郡市教育委員会	教育長	秋永　晃生	
	教育部長	藤吉　宏	（令和４年度）
		熊丸　直樹	（令和５年度）
文化財課	課長	杉本　岳史	
	係長	山崎　頼人	
	技師	髙橋　渉	

発掘作業員

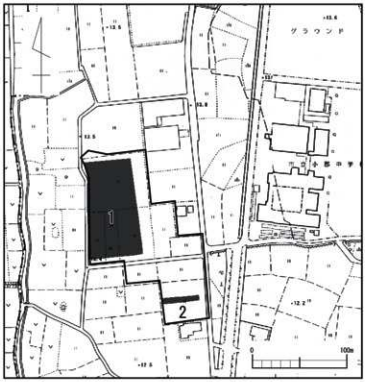
西初代　吉岡広志　黒田祐治　市瀬和子　山口玲子　吉田浩　岩本眞行　阿部孝一　串尾弥生子
瀬戸口善行　中武奈津子　中村康博　諸藤収吉　佐藤明勇　浅倉啓子　早坂幸子　（小郡市在住）
平田太輝（別府大学学生）　仲田美乃里（福岡大学学生）　服部美紀（福岡大学学生）　（順不同）

第２章　位置と環境

1、地理的環境

小郡市は福岡県の中央部に位置し、博多湾から南へ 25km 程の内陸部にあたる。市域は東西 6km、南北 12km、総面積 45.5 ㎢を有する南北に長い行政区をもつ。宝満山を水源とする宝満川により東西に二分され、その西岸は脊振山系から派生する丘陵部（通称、三国丘陵）を頂部として低位段丘が南へ向かって伸び、沖積地を経て筑紫平野へと連なる。

福童石橋遺跡は宝満川の支流秋光川の左岸低台地に位置し、遺構面の標高は 13.2m 前後を測る。

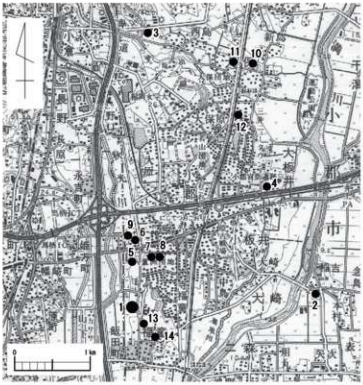


第１図　福童石橋遺跡　調査地位置図（S=1/4,000）

2、歴史的環境（第１・２図）

福童石橋遺跡は今回が初めての調査である。遺跡が所在する西福童区は古くから水害に見舞われた地域で、近年の例では昭和 28・38 年の大水害がある。さらに最近でもたびたび水害に見舞われる地域である。中世以降を中心に周辺の状況を見ていきたいと思う。

中世になると稲吉元矢次遺跡 (2) や西島遺跡 3(3) といった拠点集落が形成されるようになる。稲吉元矢次遺跡は 12 世紀～ 14 世紀にかけて営まれた宝満川を介した港町で、中国から輸入された陶磁器が多量に見つかるなど 12 世紀～ 14 世紀における集落の繁栄を垣間見ることができる。また、絵といろは歌が墨書された土師器や碁石等の娯楽道具も出土している。また多くの鉄滓とともに溶かした鉄をすくう取瓶も発見され、集落内で鍛冶を行っていたと考えられる。西島遺跡 3 次調査の土坑からは 12 世紀前半代～ 12 世紀中頃の多数の青磁や土師器



第２図　周辺遺跡分布図（S=1/50,000）

が出土しており、特に青磁は小郡市内で出土量が多い遺跡であることから、拠点集落であったと考えられる。大板井遺跡（4）でも散発的であるが、同時期の井戸や土壙墓が確認されている。

一方、福童山の上遺跡 (5) や小郡正尻遺跡 (6)、小郡野口遺跡 (7) で中世の集落が確認されている。福童山の上遺跡は 13 世紀前半から 13 世紀後半の集落が確認され、土師器の小皿や東播系須恵器などとともに龍泉窯系青磁碗や青白磁合子が出土している。また大型の方形周溝を確認しておりとても興味深い。プラントオパール分析の結果、一帯に水田が広がっていたと考えられる。小郡野口遺跡（7）では 14 世紀中頃から 15 世紀の集落が確認され、土師器や龍泉窯系青磁、備前焼のすり鉢などが出土している。小郡堂の前遺跡 (8) では 13 世紀半ばから 14 世紀中頃の井戸や大溝を検出している。遺物は土師器や黒色土器に交じり龍泉窯系青磁碗が出土している。また小郡南原遺跡 (9) でも詳細な時期は不明であるが中世の溝と竪穴状遺構を確認している。

その後 14 世紀以降になると大保西小路遺跡 (10) において 14 世紀～ 16 世紀を中心とする集落跡が発見されている。土坑や鍛冶関連遺構などとともに地下式土坑が確認されている。この地下式土坑は墓地の可能性が指摘されている。この土坑からは多くの陶磁器類とともに「明」の銅銭や五輪塔空・風輪、青銅製懸仏などの注目すべき遺物が数多く出土している。また、三沢寺小路遺跡 (11) では従来 1349 年の大保原合戦の戦死者を弔った善風寺跡地に比定される伝承が残る地域である。近年の発掘調査成果により区画溝や、この区画溝に沿った土壙墓群から大量の軒丸瓦・軒平瓦・土師器が出土し、時期的にも伝承通りこの地に善風寺が存在した可能性が高い。大原小学校の校庭には大保原合戦で亡くなった武将の塚と伝わる「善風塚」(12) もあり、この地で勃発した九州南北朝最大の戦い「大保原（大原）合戦」が大きな画期となっている。

近世になると薩摩街道沿いに宿場町が築かれる。福童東内畑遺跡 (13) で、近世の所産である遺構・遺物が集中している。溝状遺構が多数検出され、井戸状遺構・廃棄土坑などの生活に密着した遺構が見つかっている。注目される遺構として 1 号溝状遺構があげられる。溝から良品の陶磁器を一括して廃棄した様相を確認した。遺構の時期は 17 世紀台であり、当該時期は万次二年（1659）・延宝四年（1676）に洪水に襲われた記録が古文書に残っている。この一括廃棄はその際に廃棄された可能性が指摘されている。また隣接する福童町遺跡 (14) でも 17 世紀台の溝を多く検出している。溝の性格については区画施設と考えられている。

第３章　福童石橋遺跡の遺構と遺物

1、調査の概要

本調査区は現在田畑が広がっている。層序は耕作土の下に黒色土が堆積し、さらに黒色土を掘り下げると褐色ローム（基盤層）が現れ、遺構はこの褐色ロームを掘り込んでいる。遺構の標高は 13.2m 前後である。時期は中世と近世であり、近世の遺構の埋土は褐色土で締まりがない。中世の遺構の埋土は黒色土でしまっている。検出した遺構は土坑 12 基、溝状遺構 22 条、道路状遺構 1 条である。以下遺構ごとに説明を行っていく。

2、遺構と遺物

(1) 土坑

1 号土坑（第 3 図　図版 2・3）

調査区北西側で検出した土坑で隅丸方形を呈する。長さは長軸 1.15m、短軸 0.8m、深さ 0.2m を測る。床面にむかって緩やかに下り、床面は水平である。遺構からは完形の土師器坏が出土している。1 号土坑は土壙墓の可能性があり、土師器の坏は副葬品である可能性が高い。

出土遺物（第 17 図　図版 9）

第 17 図 1 は土師器の坏である。口径 12.4cm、器高 2.7cm を測る。底部に糸切りを施す。

2 号土坑（第 3 図　図版 2・3）

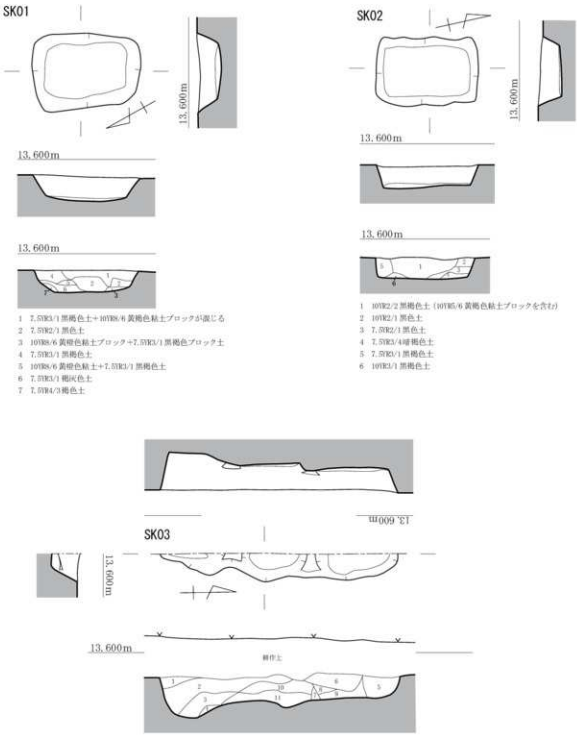
調査区北西側で検出した土坑で 1 号土坑の東側に位置し、1 号土坑、2 号土坑が並び合ったような状況で検出した。遺構平面は隅丸方形を呈し、長さは長軸 1.1m、短軸 0.7m、深さ 0.2m を測り、1 号土坑とほぼ同一の規模である。遺物は出土していない。遺構の形態から 2 号墓も土壙墓の可能性がある。

3 号土坑（第 3 図　図版 3）

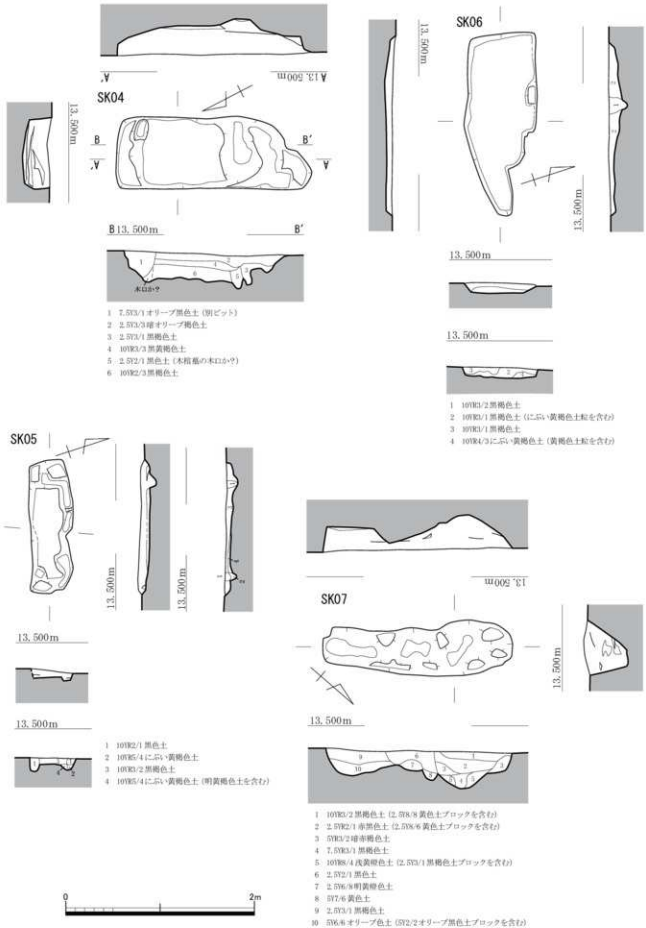
調査区北西側で検出した土坑で、遺構の半分以上が調査区外にのびる。平面は隅丸長方形を呈していると思われる。現状で長軸 2.5m、短軸 0.4m、深さは最大 0.4m を測る。複数のテラスを有し北側から南側に向かって階段状に下っていく。壁は急激に落ちている。遺物は小片のため図化していない。

4 号土坑（第 4 図　図版 3・4）

調査区西側で検出した土坑で長方形を呈する。南東側の一部に攪乱が入る。現状で長軸 1.75m、短軸 0.75m、深さ 0.35m を測る。南北にテラスを有し、中央にむかって緩やかに下っている。さらに中央の平坦面の周囲に細い溝を掘り込んであり、平坦面の一部がピット状に窪んでいる。土層は黒褐色土と黄褐色土が水平に堆積し、北側と南側に黒色土の掘り込みが確認できる。遺構の形態や土層観察から 4 号土坑は木棺墓の可能性が高く、この黒色土の掘り込みは木棺の可能性が考えられる。遺物は残念ながら出土していないため、時期の特定は困難である。



第３図　１～３号土坑　実測図（S=1/40）



第４図　４～７号土坑　実測図（S=1/40）

5 号土坑（第 4 図　図版 3・4）

調査区西側で検出した土坑で、長方形を呈する。長軸 1.4m、短軸 0.5m、深さ 10cm を測る。遺構の残存状況がとても悪い。壁は緩やかに下り、底面は水平である。底面の周囲に溝を掘り込んでいる。土層は黒褐色土が堆積し、四方の細い溝には黒色土が掘り込まれている。5 号土坑も 4 号土坑同様、木棺墓の可能性が高くこの黒色土の掘り込みは木棺の痕跡であろう。遺物は残念ながら出土していない。

6 号土坑（第 4 図　図版 3・4）

調査区西側で検出した土坑で、5 号土坑の東側に位置する。平面は不整形を呈する。長軸 1.9m、短軸 0.75m、深さ 10cm を測る。床面に向かって緩やかに下り、床面は水平である。遺物は出土していない。

7 号土坑（第 4 図　図版 3・4）

調査区西側で検出した土坑で、5 号土坑の西側に位置する。土坑の西側を 6 号溝に切られる。平面は隅丸方形を呈する。長軸 2.0m、短軸 0.5m、深さ 25cm を測る。複数の小さいテラスを有し、一部が窪む。遺物は出土していない。

8 号土坑（第 5 図　図版 4）

調査区中央部で検出した土坑で 21 号溝に切られる。平面は不整形を呈する。北側の一部を掘りすぎてしまった。長軸 5.4m、短軸 3.3m、深さ 30cm を測る。土層を観察すると遺構を掘削後、南側をもう一度再掘削している。複数のテラスを有し、北側から南側に向かって下っていく。

出土遺物（第 17 図　図版 9）

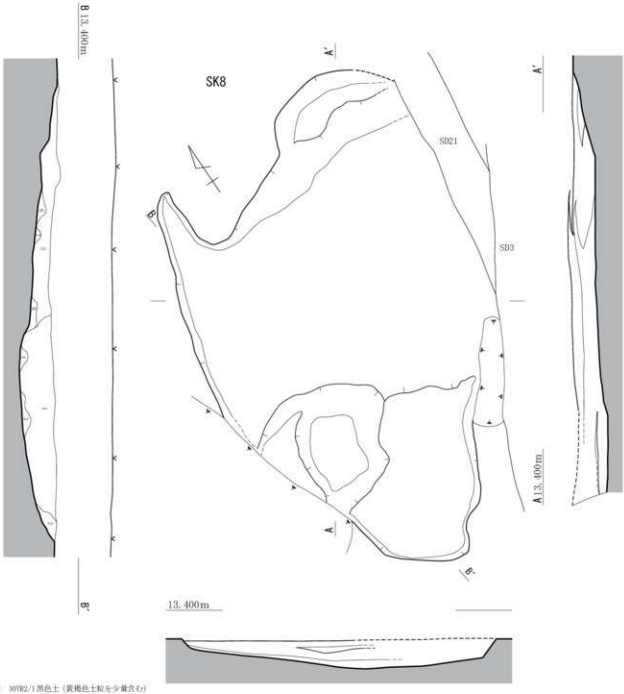
第 17 図 2 は土師器の皿である。底径 7.8cm を測る。底部に糸切りを施す。

9 号土坑（第 6 図　図版 4）

調査区中央で検出した土坑で、8 号溝を切る。平面は円形を呈し、規模は長軸 1.4m、短軸 1.1m、深さ 0.9m を測る。テラスを有し、中央部が急激に下がる。また湧水が激しい。土層は黒色土と黒褐色土が水平に堆積しており人為的な埋め戻しであると思われる。遺物は出土していない。時期は不明であるが素掘りの井戸であると思われる。

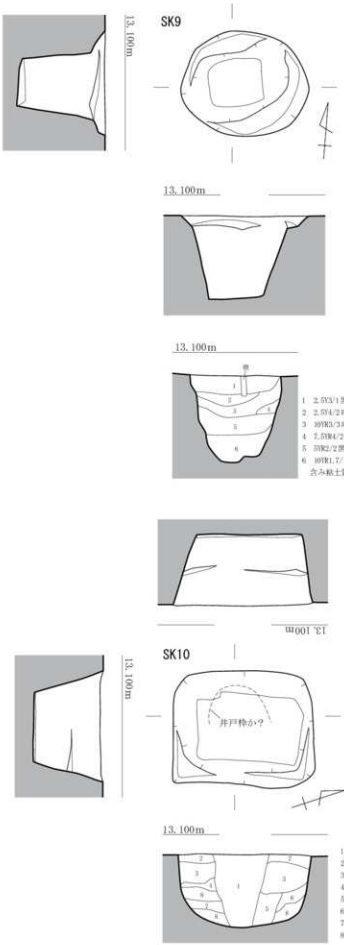
10 号土坑（第 6 図　図版 4）

調査区東側で検出した土坑で、11 号溝の北側に位置する。井戸と思われる。湧水が激しい。遺構は方形を呈しており、検出段階では黒褐色土と地山由来の黄褐色粘土ブロックが混じっていた。遺構を半裁してみると中央部に井戸枠であろうと考えられる円柱状の層があり、その周りを黄褐色土と褐灰色土をもちいて固定している様相が見て取れた。井戸枠の規模は上層で直径 0.6m、下層で 0.25m である。掘方は長軸 1.5m、短軸 1.2 m、深さ 0.7m を測り、平面は方形である。井戸を作る際にまず方形に掘り、その中央に井戸枠を設置し、黄褐色土と褐灰色土を交互にもちいて井戸枠を固定したと考えられる。井戸枠内及び掘方からの遺物は出土していない。

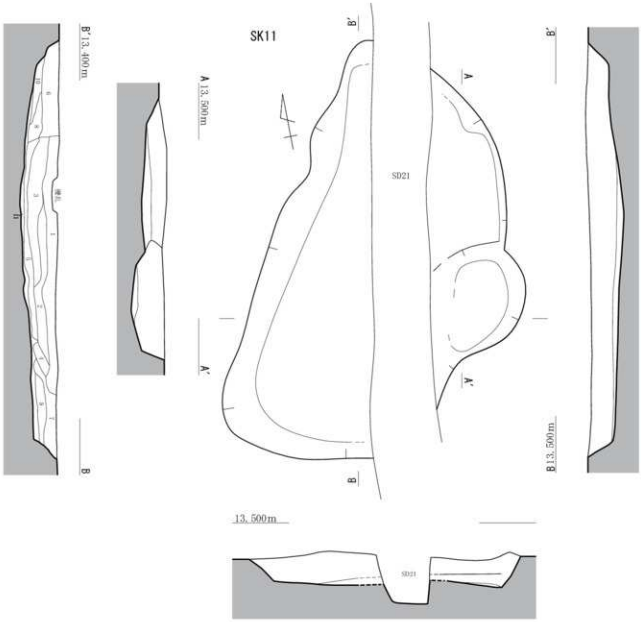


1　10YR2/1 黒色土（黄褐色土粒を少量含む）
2　10YR4/4 褐色土（黒褐色土粒を少量含む）
3　10YR5/4 にぶい黄褐色土（褐色土ブロックが混じる）
4　10YR5/4 にぶい黄褐色土（褐色土ブロックを少量含む）
5　10YR3/1 黒褐色土（にぶい黄褐色土粒を多く含む）
6　10YR6/4 にぶい黄褐色土（黒褐色土ブロックが混じる）
7　10YR6/4 にぶい黄褐色土（黒褐色土ブロックを多く含む）
8　10YR3/2 黒褐色土（にぶい黄褐色土粒を多く含む）

第５図　８号土坑　実測図（S=1/40）



第６図　９・10 号土坑　実測図（S=1/40）



1　10YR3/2 黒褐色土（明黄褐色の粘土ブロックを少量含む）
2　10YR3/1 黒褐色土（明黄褐色の粘土ブロックとにぶい・黄褐色土粒を少量含む）
3　10YR2/1 黒色土（明黄褐色土粒を中量含む）
4　10YR2/2 黒褐色土（明黄褐色の粘土ブロックを少量含む）
5　10YR2/1 黒色土（にぶい・黄褐色粘土ブロックを含む）
6　10YR3/1 黒褐色土（10YR8/8 黄土粘土ブロックを含む）
7　7.5YR3/1 黒褐色土（にぶい・黄褐色土粒を少量含む）
8　10YR4/3 にぶい・黄褐色土
9　10YR3/2 黒褐色土（にぶい・黄褐色粘土ブロック・明黄褐色土粒を少量含む）
10　10YR4/3 にぶい・黄褐色土（1 cm大の 10YR8/8 黄土色粘土ブロックを含む）
11　10YR7/6 明黄褐色粘質土

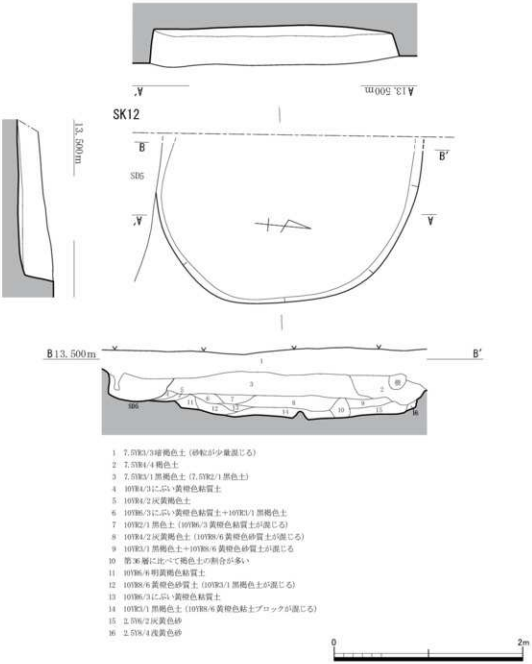
第 7 図　11 号土坑　実測図（S=1/40）

11 号土坑（第 7 図　図版 4・5）

調査区中央部で検出した土坑で、21 号溝に切られる。平面は隅丸長方形を呈し、その規模は長軸 3.42m、短軸 2.85m、深さ 0.3m を測る。床面に向かって緩やかに下り北西側が一部窪んでいる。遺物は小片のため図化していない。

12 号土坑（第 8 図　図版 5）

調査区北西側で検出した土坑で、土坑の西側半分が調査区外に延びる。遺構平面は円形を呈する。遺構の南側を 5 号溝が切る。規模は長軸 2.6m、短軸 1.7m、深さ 0.45m を測る。床面に向かって比較的緩やかに下っている。底面は水平である。土層は黒褐色土と黄褐色粘質土が交互に堆積し、床面は砂である。遺物は出土していない。



第 8 図　12 号土坑　実測図（S=1/40）

(2) 道路状遺構

1 号道路状遺構（16・17 号溝）（第 9・10 図　図版 5）

調査区の南東隅で検出した道路状遺構で、長さ 9.8m、幅 2.8m を測る。北東 - 南西に延びている。最低 2 回の路面補修の状況を確認することができた。東側の溝を 17 号溝、西側の溝を 16 号溝としている。遺物は近代の陶磁器が出土している。以下ではこの時期変遷を整理して報告する。

○第 1 段階（第 11 図）

道路状遺構の構築段階である。東西両端に側溝を取り付けて路面を確保している。まず湿気抜きのためであろうか、路面部分に波板状土坑を掘削する。その後その上に黒褐色土をもちいて路面を形成している。この路面はとても固く締まっており、路面の厚さは 15cm ほどでである。東西に側溝を掘削している。側溝は 17 号溝が深く幅 1.1m、深さ 0.6m を測る。一方 16 号溝は幅 0.5m、深さ 0.4m を測る。

○第 2 段階（第 11 図）

第 1 段階の側溝を黒色土と粘土ブロックをわずかに含む粘質土で人為的に埋め立てている。埋め立ては第 1 段階の路面まで埋め立てている。埋め立てを行った後、その上に道路面を再構築する。黒褐色土をもちいて路面を形成し、17 号溝のみ再掘削している。側溝の規模は、幅 0.7m、深さ 0.15m と第 1 段階に比較して規模が縮小している。路面の厚さは 10cm ほどである。

出土遺物

16 号溝出土遺物（第 17 図）

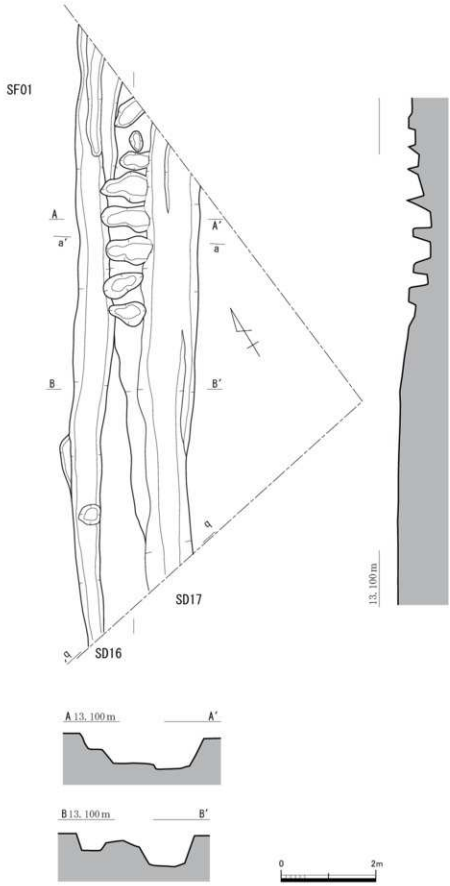
第 17 図 40 は龍泉窯系青磁碗の底部である。内外面に緑灰色の釉を施す。高台の内側に釉は施さない。41 は瓦質のすり鉢である。外面はハケメを施したのち、ナデ消している。ナデは粗雑で、ハケメが一部残存している。内面はハケメを施した後、4 条一組のすり目を刻む。

17 号溝（第 18 図　図版 12・13）

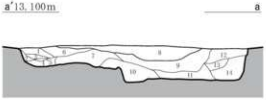
第 18 図 1・2 はすり鉢である。1 は外面に赤褐色の鉄釉を施す。内面のすり目の溝がなくなるほど使い込まれている。2 は外面に黒褐色の釉を施している。内面の底部付近には指頭の痕跡が強く残る。2 は 1 と比較してすり目の溝が良く残存しており 1 と比べると対照的である。使用開始後すぐに廃棄されたと考えられる。3 は磁器の碗である。内面は蛇の目剥ぎを施す。18 世紀中頃から 19 世紀ごろの所産である。

路面及び波板状土坑出土遺物（第 18 図　図版 15）

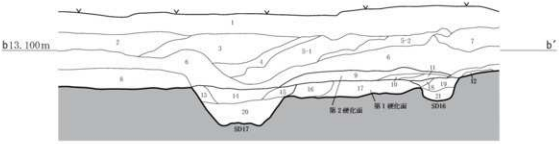
第 18 図 9・10 は青磁の碗である。9 は龍泉窯系青磁椀の胴部で、内外面に緑灰色の釉を施す。内面に花草文を施す。10 の外面に蓮弁文が施されている。17 はサヌカイト製の三稜尖頭器である。波板状土坑からの出土である。長軸 3.7cm、短軸 1.2cm、厚さ 1.1cm、重量 3g を測る。先端部は使用による欠損がある。混ざり込みである。



第９図　１号道路状遺構実測図　(S=1/80)

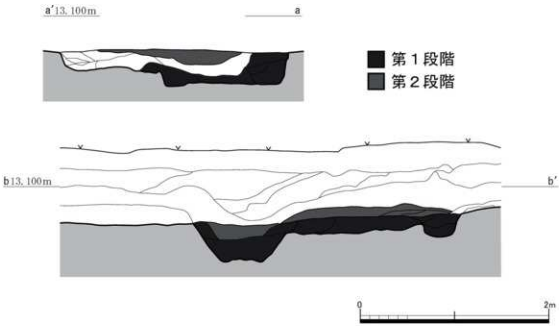


1　10YR3/2 黒褐色土
2　10YR3/1 黒褐色土
3　10YR3/2 黒褐色土
4　7.5YR3/1 黒褐色土
5　10YR3/1 黒褐色土
6　10YR6/3 にぶい黄橙色土
7　10YR3/3 暗褐色土
8　7.5YR4/2 灰褐色土＋7.5YR4/3 褐灰色土
9　10YR4/2 灰褐色土
10　10YR4/1 褐灰色土（路面1層目か？，10YR5/8 黄褐色粘土ブロックを含む）
11　10YR3/3 暗褐色土
12　10YR2/1 黒色土
13　10YR2/2 黒色土（10YR6/4 にぶい黄橙色粘土ブロックを含む）
14　10YR2/2 黒色土



1　10YR2/1 黒色土
2　7.5Y3/1 黒褐色土（6cm大の粘土ブロックを含む）
3　10YR6/6 黄橙色土（10YR7/8 黄橙色粘質土の粘土ブロックを少量含む）
4　10YR3/1 黒褐色土
5-1　2.5YR6/4 にぶい黄色粘土ブロック
5-2　10YR2/1 黒色土
6　10YR3/2 黒褐色土（若干土が硬化）
7　10YR5/4 にぶい黄橙色土（黒色土を若干含む）
8　2.5Y3/1 黒褐色土
9　10YR3/2 黒褐色土（第6層より土が硬化，路面の2層めか？）
10　10YR3/2 黒褐色土（路面の硬化面）
11　10YR3/2 黒褐色土（路面側約半分の土が硬化）
12　10YR2/1 黒褐色土
13　7.5YR3/1 黒褐色土（わずかに粘土ブロックを含む）
14　7.5YR3/1 黒褐色土
15　10YR2/1 黒色土
16　10YR2/2 黒褐色土
17　2.5Y2/1 黒色土
18　10YR3/2 黒褐色土
19　7.5YR2/1 黒色土（粘土ブロックをわずかに含む）
20　10YR1.7/1 黒色土（粘土ブロックをわずかに含む，粘質土）
21　10YR1/2 黒色土

第10図　1号道路状遺構　土層図（S=1/40）



第 11 図　1 号道路状遺構　土層模式図（S=1/40）

(3) 溝

1 号溝（図版 5）

調査区北西側で検出した溝で、溝の東側を 25 号溝に、西側を 2・3・4 号溝に切られる。その長さは 15.5m を測る。断面は逆台形状である。西側は 3 号溝に切られるため様相は不明であるが、西側は 25 号溝の途中で止まっている。遺物は古代の土師器が出土している

出土遺物（第 17 図）

第 17 図 3 は土師器の坏である。復元底径 9.6cm を測る。底面はヘラ切りを施す。4 は土師器の把手である。残存長 6.0cm を測り、橙色を呈する。

2 号溝（第 12・13 図　図版 5・6）

調査区の北側で検出した溝で、3 号溝に切られ、1 号溝を切る。溝の断面は U 字形で、64m 検出した。土層観察の結果、複数回にわたって掘り直しを行っているようである。遺物は土師器が出土している。

出土遺物（第 17 図　図版 9）

第 17 図 5 は土師器の坏である。復元口径 10cm、器高 2.8cm を測る。内外面ともに回転ナデを施す。6 は土師器の把手である。残存長 6.7cm を測る。7 は磁器の皿である。底径 4.0cm を測る。内外面ともにオリーブ灰色の釉薬を施す。内面底面に 5 つの砂目がみられる。8 は龍泉窯系青磁碗の胴部片である。残存長 6.3cm を測り、内外面に緑灰色の釉を施す。内面に草花文を描く。

3 号溝（第 12・13・14 図　図版 5・6）

調査区中央部で検出した溝で、2・4 号溝を切る。溝は南北方向と東方向に延びており、T 字形である。検出した長さは東西 64m、南北 31m にも及ぶ。南側で接する 7 号溝との切り合い関係を確認するため土層を設定し観察を行ったが両溝に切り合い関係は見られず同時期の溝であることが判明した。また、土層観察の結果 3 号溝も複数回にわたって掘り直しをおこなっている。溝の断面は U 字形である。溝の埋土は褐色土である。遺物は陶磁器が出土しており 19 世紀中頃の時期であろう。

出土遺物（第 17・18 図　図版 9・10・11・15）

第 17 図 9 は陶器の皿である。底径 3.8cm を測る。内面と外面上部に灰色の釉を施す。底面は糸切りを施している。10 は磁器の碗である。口径 10.0cm、高台径 3.8cm、器高 5.5cm を測る。12 は磁器の底部片である。内面に草花文を描く。外面高台内に砂粒が付着する。13 は磁器の皿で、口径 9.4cm を測る。内面に格子文を施し、内面底部は蛇の目剥ぎを施す。15 は磁器の皿である。見込みは蛇の目剥ぎで、高台は露胎である。外面に白色釉、内面に銅緑釉を施す。18 世紀後半ごろの所産であろうか。16 は白磁の紅皿である。型押し成型である。内面にのみ白色の釉を施す。他にも実測はしていないが外面に蛸唐草を施す紅皿も出土している。17 は陶器の皿である。内面に白色釉、内面は緑色釉を施し、内面には波状文を施す。18 は瓦質の火鉢口縁部片である。口縁部下に櫛描列点文を施す。外面には 1 条の突帯が巡る。19 は龍泉窯系青磁椀の口縁部である。内外面に淡緑灰色の釉を施している。外面には片掘蓮弁文を施し、弁の中心線に鎬をもつ。第 17 図 15 は五徳と思われる土製品である。残存長 12.0cm を測る。ヘラによる丁寧なナデにより調整している。上部は扇形に開く構造をしている。煤などの付着は見られない。第 18 図 16 は砂岩製の砥石である。1 面を砥面として利用している。

4 号溝（第 12・13 図　図版 5・6）

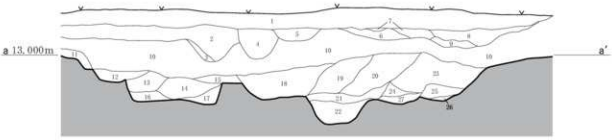
調査区北側で検出した溝で、3 号溝に切られ、1 号溝を切る。溝の断面は U 字形を呈し、64m 検出した。土層を観察すると複数回にわたって掘り直しを行っている。遺物は土師器が出土し、北側の 2 号溝と同時期の溝であると考えられる。

出土遺物（第 17 図）

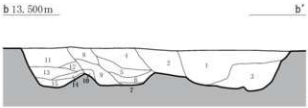
第 16 図 20 は土師器の把手である。残存長 8.5cm を測る。21 は瓦質の羽釜である。内面は丁寧なヨコナデを行っており、外面は板状工具によりナデ調整をしている。22 は土師器の土鍋である。外面に厚く煤が付着している。23 は土師器の坏である。底径 7.8cm を測る。底部には糸切りがみられる。

6 号溝（第 14 図）

調査区北東から南西にかけてはしる溝で約 60m 検出した。2・3・4・7・8 号溝に切られる。溝の断面は U 字形である。埋土は黒色土に地山由来の黄褐色粘質土が水平堆積しており、よく締まっている。遺物は土師器が出土しているが小片のため実測には至らなかった。しかし切り合い関係からこの溝が一番古い時期の溝であると考えられる。



1 7.5YR4/2灰褐色土（表土）
2 10YR4/1褐灰色土
3 10YR3/2黒褐色土
4 10YR3/2黒褐色土+7.5YR4/4褐色粘土ブロック
5 10YR3/3黒褐色土（にぶい黄褐色土を含む）
6 10YR3/1黒褐色土（黒色土粒を少量含む）
7 にぶい黄橙色土（砂質土・褐色ブロックを少量含む）
8 にぶい黄橙色土（明黄褐色土ブロックを含む）
9 にぶい黄褐色土（暗褐色土を含む）
10 灰黄褐色土（褐色土ブロックを少量含む）
11 10YR3/1黒褐色土（黄褐色土粒を少量含む）
12 10YR2/1黒色土（暗褐色ブロックを少量含む）
13 10YR2/1黒色土（暗褐色ブロックを中量含む）
14 10YR2/1黒色土（暗褐色土粒を少量含む）
15 10YR3/1黒褐色土（褐色土粒を少量含む）
16 10YR3/2黒褐色土（にぶい黒褐色ブロック・褐色ブロックが混じる）
17 10YR2/1黒色土（黄褐色土粒を少量含む）
18 10YR3/1黒褐色土
19 10YR3/1黒色土（黄褐色土粒を少量含む）
20 10YR3/2黒褐色土（黄褐色土粒を少量含む）
21 10YR3/2黒褐色土粒を少量含む）
22 10YR2/2黒褐色土（黄褐色土粒を少量含む）
23 10YR2/1黒色土（にぶい黄褐色土粒を少量含む）
24 10YR2/1黒色土（黄褐色土粒と褐色土粒が混じる）
25 10YR2/1黒色土（黄褐色土と暗褐色土を少量含む）
26 10YR4/4褐色土（黄褐色土と褐色ブロックが混じる）
27 10YR3/3暗褐色（暗褐色土と黒色土ブロックが混じる）

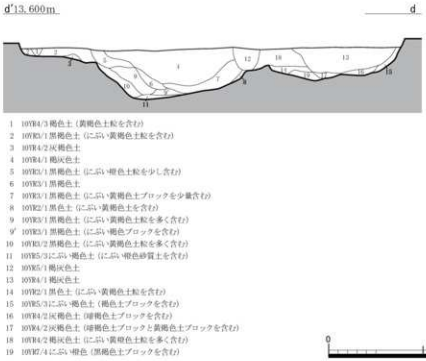


溝① 1 10YR3/1黒褐色土（a-a″土層の第18層と同様）
溝② 2 10YR4/1褐灰色土（a-a″土層の第19層と同様）
溝③ 3 10YR3/1黒褐色土（10YR8/8黄橙色粘土ブロックが混じる）
溝④-1
4 10YR2/1黒色土＋10YR8/8黄橙色粘土ブロック
5 10YR2/1黒色土（10YR8/8黄橙色粘土ブロックが多量に混じる）
6 10YR4/2灰褐色土（2～3cm大の10YR8/8黄橙色粘土ブロックが多量に混じる）
7 10YR7/6橙色粘土
溝④-2
8 10YR2/1黒色土
9 10YR4/1褐灰色土（10YR8/8黄橙色粘土ブロックが多量に混じる）
10 10YR5/2灰褐色土
溝⑤
11 10YR4/1褐灰色土
12 10YR5/2灰褐色土
13 10YR3/1黒褐色土（10YR8/8黄橙色粘土ブロックが混じる）
14 10YR3/1黒褐色土（10YR8/8黄橙色粘土ブロックが多量に混じる）
15 10YR7/6橙色粘土＋10YR7/4にぶい橙色粘土（整地層）

溝① 1 b-b″土層の第1層と同様
溝② 2 b-b″土層の第2層と同様
溝③
3 10YR3/1黒褐色土
4 10YR4/2灰褐色土
5 10YR2/1黒色土
6 10YR2/1黒色土（1cm大の10YR8/8黄橙色粘土ブロックが混じる）
溝④
7 10YR5/3にぶい褐色土
8 10YR8/8黄橙色粘土＋10YR3/1黒褐色土
9 10YR8/8黄橙色粘土＋10YR5/1褐灰色土
溝⑤
10 10YR2/1黒色土
11 10YR2/1黒色土（10YR8/8黄橙色粘土ブロックが少量混じる）
12 10YR6/3にぶい褐色土

0 2m

第12図　2・3・4号溝　土層図①（S=1/40）



第 13 図　2・3・4 号溝　土層図②（S=1/40）

7 号溝（第 14・15 図）

調査区南東から北西にはしる溝で断面は逆台形状を呈する。8・10 号溝を切っている。埋土は黒褐色土である。溝の途中で 19 号溝と合流する。3 号溝、19・20 号溝との切り合いを確認するために土層を設定したがそれぞれの溝は切り合いがなく同時期に機能していたと考えられる。18 世紀後半から 19 世紀中頃の所産である。

出土遺物（第 17 図　図版 11・12）

第 17 図 28 は陶器の小壺である。外面には暗赤褐色の釉を、内面には透明釉を施している。29 は陶器の仏飯具である。脚部のみ残存している。外面に褐色の釉を施しているが内面にはみられない。30 は白磁の紅皿である。型押し成型で、内面に白色の釉を施している。31 は磁器の瓶である。底径 8.0cm、残存高 15.7cm を測る。外面にはコバルトブルーで草花文を描く。外面には透明釉を施すが、内面には釉を施していない。

SD3

f′13.400m　　f

1　2.5YR4/3 暗灰色土
2　7.5YR4/1 暗灰色土+10YR6/6 黄褐色粘土ブロックが少量混じる

SD8

g 13.400m　　g′

1　10YR4/1 暗灰色土
2　10YR5/1 暗灰色土+1.5cm大の 10YR6/8 黄褐色粘土ブロックが混じる
3　10YR5/1 暗灰色土+1～3cm大の 10YR6/8 黄褐色粘土ブロックが混じる（人為的埋め戻し）
4　10YR3/1 黒褐色土（人為的埋め戻し）
5　10YR4/2 灰黄褐色土

SD8

h 13.600m　　h′

1　10YR3/1 黒褐色土（10YR6/6 黄褐色土ブロックを少量含む、固くしまり粘質）
2　5YR6/1 暗灰色
3　7.5YR6/3 にぶい橙色土（10YR7/6 明黄褐色土ブロックを含む、固くしまり粘質）
4　2.5YR3/1 黒褐色土（2.5YR/8 黄色土を少量含む）
5　7.5Y2/1 黒色土（10YR6/4 浅黄褐色土ブロックを含む、粘質だが軟らかいでパサついている）
6　10YR3/4 暗褐色土（2.5Y7/6 明黄褐色土を含む、大ブロックあり）

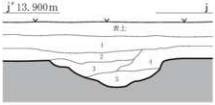
SD6

j′13.900m　　j

1　10YR5/3 にぶい黄褐色土（固くしまり、一部黒色土が混じる）
2　10YR5/1 褐灰色土（固くしまり、第1層より粘質、一部黒色土が混じる、2.5YR/6 明黄褐色土ブロックを含む）

SD7

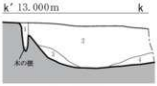
j′13.900m　　j



1　10YR5/3 にぶい黄褐色土（固くしまる土、10YR6/6 黄褐色土ブロックを含む）
2　10YR4/3 にぶい黄褐色土（固くしまる土、10YR6/6 明黄褐色土ブロックを含む）
3　10YR6/2 灰黄褐色土（固くしまる土、10YR7/6 明黄褐色土ブロックを含む）
4　10YR5/2 黒褐色土（固くしまる土）
5　10YR/1 黒色土（粘質土でしまっている、10YR7/6 明黄褐色土ブロックを含む）

SD3・7 切り合い部

k′13.000m　　k



1　10YR3/1 黒褐色土（木の根）
2　10YR3/1 黒褐色土（暗褐色土粒を少量含む）
3　10YR3/1 黒褐色土（黄褐色土を少量含む）
4　10YR3/1 黒褐色土（黄褐色土ブロックを少量含む）

SD8

l 13.600m　　l′

1　2.5Y3/1 黒褐色土（10YR7/8 黄褐色土ブロックを含む）
2　2.5Y3/2 黒褐色土
3　10YR1/6 明黄褐色土
4　7.5Y3/1 オリーブ黒色土（10YR8/6 黄褐色土ブロックを含む）
5　7.5YR2/1 黒色土（10YR6/8 明黄褐色土ブロックを含む）
6　10YR1.7/1 黒色土

SD14

m′13.400m　　m

1　10YR2/1 黒色土
2　10YR6/6 黄褐色粘土ブロック+10YR2/1 黒色土が混じる
3　10YR6/6 黄褐色粘土+10YR2/1 黒色土
4　10YR6/6 黄褐色粘土

第 14 図　3・5・6・7・8・14 号溝　土層図（S=1/40）

8 号溝（第 14・15 図　図版 6・7）

調査区南側で検出した溝で、方形の区画溝である。3・7・9・15 号溝に切られ、6・18 号溝を切る。8 号溝と 18 号溝の切り合いを確認するために土層を設定した結果、18 号溝を切って 8 号溝の北東角を掘削していることが判明した。溝の断面は逆台形状である。その距離は北側部分 54m、南北方向 44m、南側部分 33m を測り、すべての総距離は 131m にも及ぶ。埋土は黒褐色土と黄褐色粘質土が交互に水平堆積している。土層観察の結果、区画溝は一度に埋没しその後掘り直しなどを行っていないと思われる。この溝の機能については区画溝と考えらえるが、その区画の中には明確な遺構を確認できなかった。

出土遺物（第 17 図）

第 17 図 24 ～ 26 は須恵器の口縁部片である。24、25 は壺の口縁部、26 は鉢の口縁部片である。27 は龍泉窯系青磁碗の破片である。外面に数本の鎬を有する。32、33 は龍泉窯系青磁碗の底部である。内面見込部に段を有する。内外面に緑灰色の釉を施すが、高台の内側には施していない。13 世紀後半ごろの所産か。

9 号溝

調査区中央部で検出した溝で、8 号溝を切り、3・10 号溝に切られる。東西方向にはしる。断面は U 字形である。20m 検出した。遺物は小片のため図化していない。

10 号溝（図版 7）

調査区東側で検出した溝で、7・11 号溝に切られる。9・12・13 号溝を切る。溝の断面は逆台形状で、平面は L 字状である。32m 検出した。

出土遺物（第 17 図）

第 17 図 34 は瓦質のすり鉢である。外面の口縁部はヨコナデ、胴部はハケメを一部ナデ消している。調整は荒い。内面はハケメを施したのち 5 条のすり目を刻んでいる。35 は羽釜の把手である。外面の一部に煤が付着している。

11 号溝

調査区東側で検出した溝で、10 号溝の北側に位置する。南北方向にはしる。18 号溝を切る。溝の断面は U 字状で、15m 検出した。南側のほうが浅く北側にいくにつれて深くなっている。遺物は小片のため図化していない。

12 号溝（図版 7）

調査区東側で検出した溝で、平面は逆 L 字状である。10 号溝に切られる。溝の断面は逆台形であり、9m 検出した。西側が浅くなっており、東側に行くにつれて深くなる。遺物は小片のため図化していない。

13 号溝（図版 7）

調査区東側で検出した溝で、10 号溝に切られる。東西方向にはしる。溝の断面は逆台形状で、西側にテラスを有し、東側に向かって一段下がっている。9m 検出した。遺物は出土していない。

14 号溝（第 14 図　図版 7）

調査区の南側で検出した溝で、8 号溝の東側に位置する。南北方向にはしる。溝断面は逆台形状で、3.3m 検出した。この溝は溝を掘削後、黄橙色粘土と黒色土をもちいて、床面の調整を行っている。その後黒色土が堆積し、埋没している。遺物は出土していない。

15 号溝（第 16 図　図版 7）

調査区の南側で検出した溝で、8・19・20 号溝をきる。南東方向から北東方向にはしる溝である。溝の断面は逆台形に近い U 字状で黒色土と褐色土がレンズ状に堆積している。遺物は、近代の陶磁器が出土している。

出土遺物（第 17 図　図版 12）

第 17 図 36 は白磁の皿である。口縁部が花弁状になる。内面は蛇の目剥ぎを行っている。37 は磁器の皿である。内面に草花文を描く。38、39 は磁器の碗である。38 は外面にコバルト釉を施す。内面に文様を描く。39 は外面に草文様を描く。

18 号溝（第 15・16 図　図版 6・7・8）

調査区東側で検出した溝で、東西方向にはしる。8・11 号溝に切られる。溝の断面は逆台形状で、西側にテラス面を有し、東側が一段下がっている。10m 検出した。

出土遺物（第 17 図　図版）

第 17 図 42 は土師器の皿である。復元口径 9.2cm を測る。底部は糸切りを施している。内面には煤が付着しており、灯明皿であろう。13 世紀中頃の所産か。

19 号溝（第 15 図　図版 8）

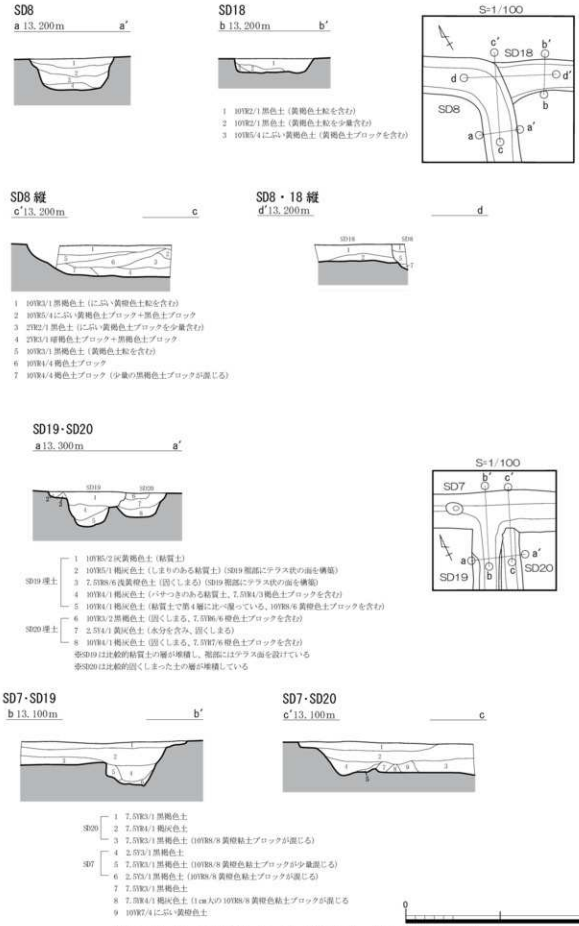
調査区南中央部で検出した溝で、7 号溝と 15 号溝をつなぐように位置している。溝の南側の一部に削平をうけるが、距離は 23m を測る。東側には 20 号溝がはしるが、土層観察の結果 20 号溝を切っていることがわかった。20 号溝の埋没後、掘り直しを行ったものが 19 号溝である。溝を掘削する際に西側にテラスを構築している。埋土は灰黄褐色粘質土と褐灰色土が水平に堆積しており、人為的な埋め戻しの痕跡がみられる。また北側に接する 7 号溝との切り合いを確認するために土層を設定したが 2 条の溝には切り合い関係がなかった。同時期に機能していた溝であると思われる。

出土遺物（第 18 図　図版 12）

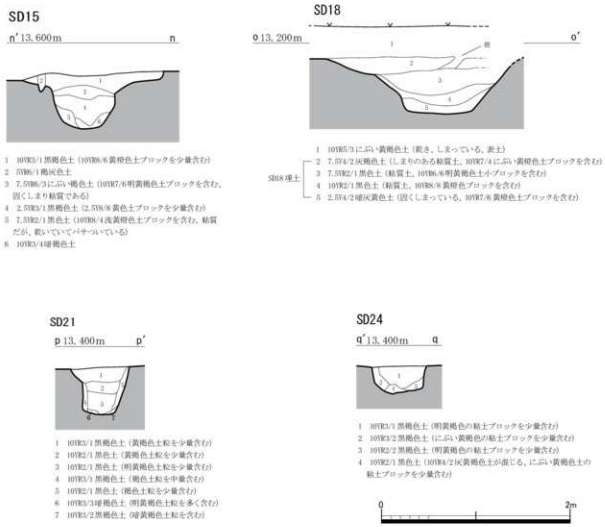
第 18 図 4 は磁器の碗である。内面にはオリーブ灰色と赤褐色の鉄釉の 2 色を使い分けている。外面には赤褐色の鉄釉を施すが、外面胴部下半から高台にかけては無釉である。

20 号溝（図版 8）

調査区南中央部で検出した溝で、19 号溝の東側に位置している。土層観察により、黒色土と褐灰色土で人為的に埋め戻しを行った後に、もう一度 19 号溝を再掘削している。規模は 23m である。溝の断面は逆台形状で、19 号溝に比べ浅い。そして北側に接する 7 号溝との切り合い関係は見られず同時期の溝であると思われる。遺物は小片のため図化していない。



第 15 図　8・18 号溝、7・19・20 号溝　土層図（S=1/40）



第 16 図　15・18・21・24 号溝　土層図（S=1/40）

21 号溝（第 16 図　図版 8）

調査区中央部で検出した溝で、3・7・23 号溝に切られる。8・11 号土坑、24 号溝を切っている。南北方向にはしる。9 号溝との切りあい関係については不明である。20m 検出した。溝の断面は逆台形状で、溝の埋土は黒色土と黒褐色土が水平堆積している。南側が浅くなっており、北側に向かうにつれ深くなっている。遺物は土師器の鍋の破片が出土しているが小片のため図化していない。

22 号溝

調査区東側で検出した溝で、4 号溝を切る。規模は 15m 検出し、溝の平面は逆 L 字状である。遺構の埋土は褐色土であり、溝の深さは数センチととても浅い。遺物が出土していないため時期の断定は難しいが近代の時期の溝であると思われる。

23 号溝

調査区中央部で検出した溝で、溝の平面はＬ字状を呈する。10m 検出した。この溝の埋土も褐色土であり、溝の深さも数センチととても浅い。遺物は出土しているが小片のため時期の特定は困難である。近代の溝と思われる。また 23 号溝の周辺にも同様の浅い溝を検出している。これらの溝も近代の溝であろう。

24 号溝（第 16 図　図版 8）

調査区中央部で検出した溝で、11 号土坑の北側に位置する。溝は北西から南西方向にはしり、溝の断面はＵ字状である。溝の長さは 6.5m を測る。南西部分が浅くなり、北西に向かうにつれ深くなっている。遺物は小片のため図化していない。

25 号溝（図版 8）

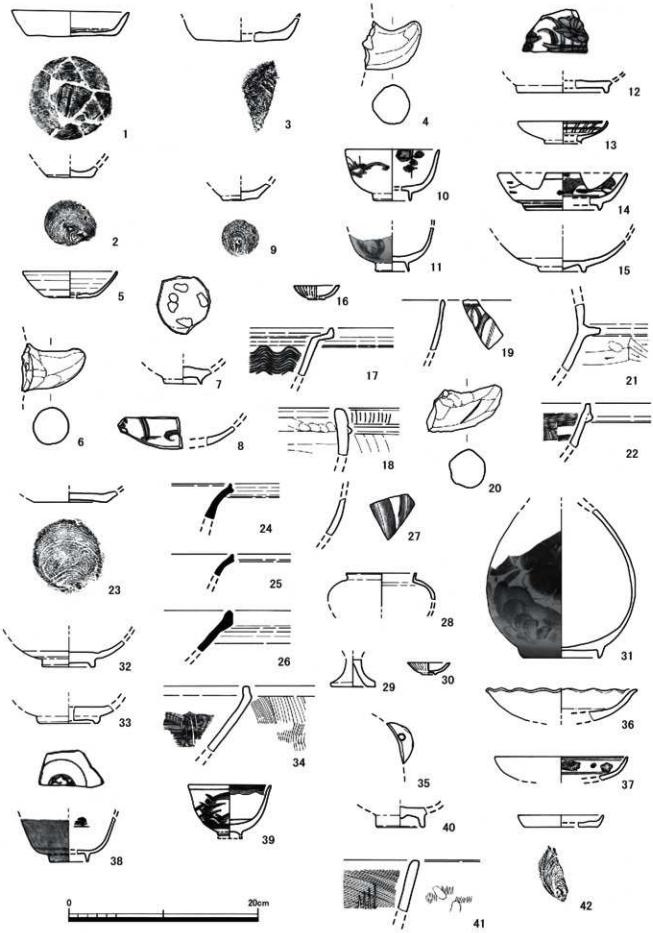
調査区北側で検出した溝で、南北方向にはしる溝である。1 号溝をきる。20m 検出し、調査区外にのびる。溝の断面はＵ字状で、溝の深さは数センチと浅い。溝からは陶磁器が出土し、近代の溝と思われる。

出土遺物（第 18 図　図版 13・14）

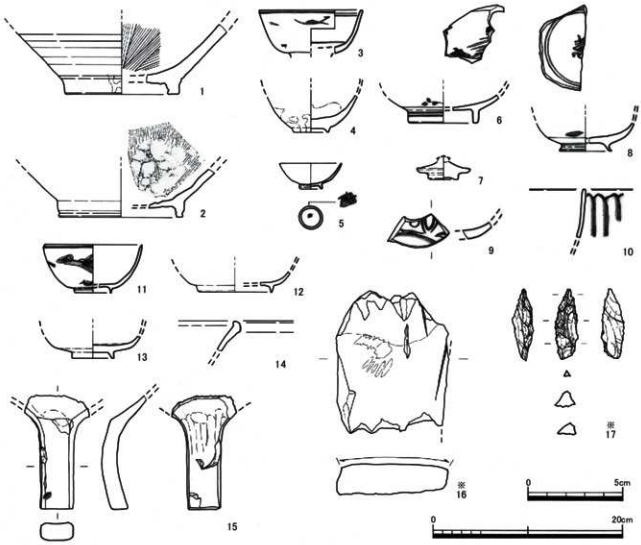
第 18 図 5・6・8 は磁器の碗である。5 の高台側面には櫛歯文を描く。外面高台の内面に銘を描く。6 は広東碗である。内面に航行中の帆船と海の地平線にしずむ夕日を描いている。外面には草花文を描いている。8 の見込みには「寿」文を描く。外面にも一部文様がみられる。全体的に透明釉がくすんでいる。7 は磁器の蓋である。外面にはオリーブ灰色の鉄釉を施す。

2・3・4 号溝切り合い部　出土遺物（第 17 図　図版 14）

第 17 図 11 は磁器の碗である。外面には山際から太陽が昇る場面を描いている。12 は磁器の皿である。内外面に白色の釉を施す。13 は陶器の皿である。内外面に灰褐色の釉を施す。外面高台から胴下半は無釉である。内面は蛇の目剥ぎを施す。14 は瓦質の鉢の口縁部片である。



第17図　1・8号土坑、1・2・3・4・7・8・10・15・16・18号溝　出土遺物実測図（S=1/4）



第18図　3・7・19・25号溝、1号道路状遺構　出土遺物実測図（S=1/4、※：S=1/2）

第４章　調査の成果

今回の調査では土坑 12 基、溝 22 条、道路状遺構１条を検出した。福童石橋遺跡は今回の調査が始めての調査である。そこで調査成果をもとにこの地の歴史を紐解いていきたいと思う。

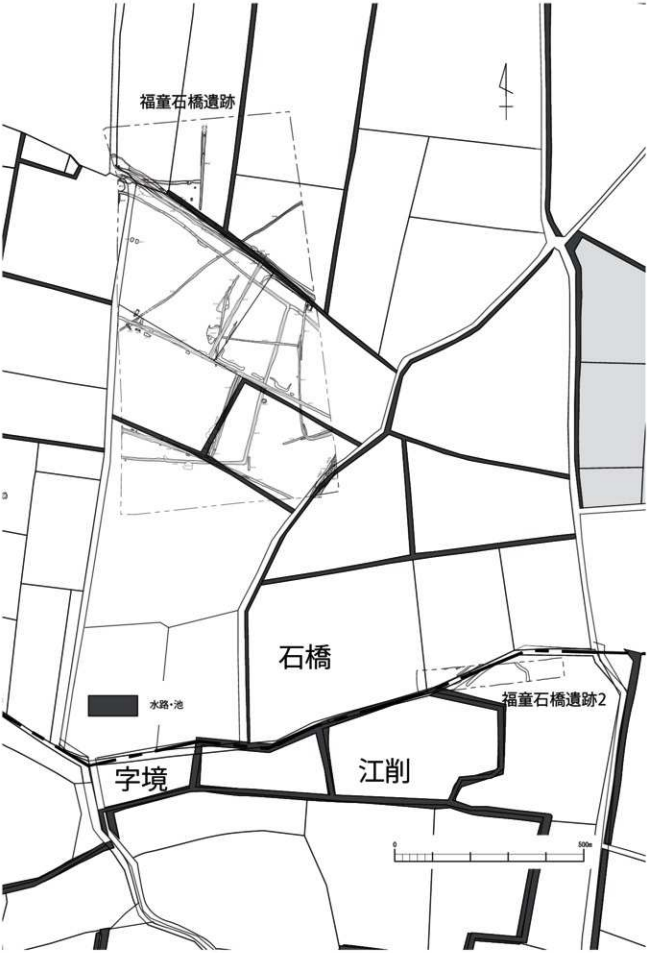
この地で人々が最初に生活した痕跡は中世期に見受けられる。それ以前にも土師器の把手が出土している。混じり込みと思われるが、中世以前にも人々の生活の痕跡が見受けられる。中世期の遺構としては１号土坑、１・２・４・８・10 号溝が当該時期にあたる。１号土坑からは 13 世紀後半の土師器坏が１個体完形で出土している。形態的特徴から土壙墓の可能性がある。２号土坑は出土遺物がなく正確な時期の特定は難しいが１号土坑に隣接し、土坑の形態も１号土坑と類似しており、同時期の土坑墓と考えている。また８号溝は断面台形状の方形区画である。北側は約 59m、東側 44m、南側 33m 検出し、西側は調査区外に延びる。区画溝からは 13 世紀後半の遺物が出土している。方形区画に内側には構造物等の遺構は確認していない。近隣の遺跡に目を向けると福童山の上遺跡２でも同時期の方形区画を確認している。２・９・11・12 号溝が方形に巡り、11 号溝は掘立柱建物を囲繞している。福童山の上遺跡４でも区画する溝の続きを検出している。時期は 13 世紀後半の時期であり本調査区８号溝との時期とも合致する。福童山の上遺跡４では区画する溝の性格について「排水をはじめ、生活空間・領域の境目として利用されていたとも想定できる」と指摘している（『福童山の上遺跡４』2002）。福童石橋遺跡で確認した８号溝も同様の性格を有していたのであろう。

また今回の調査では素掘りの井戸を２基確認している。９号土坑は８号溝を切っているため中世以降の井戸であろう。明治 33 年の地籍図には調査区周辺は田が広がっており、集落や井戸等は描かれていない。井戸からの遺物が出土していないため時期は不明であるが近世以前の可能性が高い。

次にこの地で人々の痕跡が見受けられるのは 19 世紀後半になってからである。３・７・15・19・20 号溝と１号道路状遺構が当該時期にあたる。３号溝は２・４号溝を切って作られている。最下層からの出土遺物には少量であるが中世の遺物の資料も含まれることから、中世の土地区画・土地利用を踏襲して近世集落が構築された可能性が高い。また土層観察の結果、溝は数回にわたって掘り直しを行っており定期的に溝さらいを行っていたと思われる。

また今回の近世の溝を明治 33 年に刊行された地籍図と照合するとおおよそ一致する。またその地籍図には道路も描かれており、今回検出した１号道路状遺構と一致した。またその地籍図には薄い和紙が貼られており、「昭和年耕地整理」という印鑑が押されており、昭和期に耕地整理が行われたと考えられる。明治時代に作成された地籍図と発掘調査の成果が一致したことは大きな成果である。耕地整理が行われる前のこの地の歴史の一端を垣間見ることができた。

また、７号溝の西側に木棺墓と考えられる土坑群が存在する。土坑からの遺物の出土は皆無であり、時期は不明である。時期の特定は困難であるが、土坑群は７号溝に沿うように立地しており、７号溝との関係が指摘できる。今後の周辺の調査に期待である。



第 19 図　福童石橋遺跡　地籍図　合成図（S=1/1,000）

表1 福童石橋遺跡　出土遺物　観察表

法量＝口：口径、高：器高、底：底径、高台：高台部径。
器種＝須：須恵器、土：土師器、磁＝磁器、陶＝陶器

神図番号	図版番号	出土遺構	器種	法量cm（復元値）	色調	胎土	焼成	成形・調整方法	備考	実測番号
第17図 1	9	SK1	土：坏	口：12.4 底台：9.3 器高：2.7	橙色	砂粒を含む	良好	内外：回転ナデ 外底：糸切り		1
第17図 2	9	SK8	土：坏	底径：7.8 器高：1.2	内：灰黄色 外：鈍い黄色	砂粒を含む	良好	内外：回転ナデ 外底：糸切り		1
第17図 3	.	SD1	土：皿	底径：(9.6) 器高：2.5	内：黒褐色～灰白色 外：淡黄橙色	砂粒を含む	良好	内外：回転ナデ 外底：ヘラ切り		1
第17図 4	.	SD1	土：把手	残存長：6.0	橙色	砂粒を含む	良好	ナデ		2
第17図 5	9	SD2	土：坏	口：(10.0) 器高：(2.8)	橙色	砂粒を含む	良好	内外：回転ナデ		1
第17図 6	.	SD2	土：把手	残存長：6.7	淡黄橙色	砂粒を含む	良好	基部：指オサエ 他：ナデ		2
第17図 7	9	SD2	磁：皿	底径：4.0 器高：(1.2)	釉：灰白色	精緻	良好	ロクロ水引き	内面に砂目有。	4
第17図 8	9	SD2	青：碗	残存長：6.3	素：褐灰色 釉：緑灰色	精緻	良好	ロクロ水引き	外面に草花文。	3
第17図 9	10	SD3	陶：皿	底径：(3.8) 器高：(1.9)	素：赤褐色 釉：褐灰色	精緻	良好	内外：回転ナデ 外底：糸切り		20
第17図 10	10	SD3	磁：碗	口：(10.0) 高台：3.8 器高：5.5	素：灰白色 釉：白色	精緻	良好	ロクロ水引き	内外面に文様有。	3
第17図 11	9	SD3	磁：碗	高台：3.4 器高：(4.6)	素：白色 釉：透明釉	精緻	良好	ロクロ水引き	外面に文様有。	4
第17図 12	10	SD3	磁：皿	底径：(9.6) 器高：(1.9)	素：白色 釉：透明釉	精緻	良好	ロクロ水引き	内面に花文様有。 外面底部に砂粒付着。	13
第17図 13	10	SD3	磁：皿	口：(9.4) 高台：(4.0) 器高：(2.4)	素：白色 釉：白釉	精緻	良好	ロクロ水引き	内面に格子文。 内面、蛇の目剥ぎ。	8
第17図 14	10	SD3	磁：皿	口：(13.4) 高台：(8.0) 器高：(4.0)	素：灰白色 釉：灰白色、緑色	精緻	良好	ロクロ水引き	内面に文様有。	18
第17図 15	10	SD3	陶：碗	高台：(4.8) 器高：(3.4)	素：明褐色 釉：内緑色、外白色	精緻	良好	ロクロ水引き	内面は蛇の目剥ぎ。	19
第17図 16	10	SD3	白：紅皿	口：(5.0) 高台：(1.8) 器高：(1.5)	素：灰褐色 釉：白色	精緻	良好	型押し成型		14
第17図 17	10	SD3	磁：鉢	器高：(5.0)	素：明褐色 釉：内灰白色　外緑色	精緻	良好	ロクロ水引き	内面に波状文。	17
第17図 18	10	SD3	瓦：鉢	器高：(4.9)	内：褐灰色 外：鈍い黄橙色	精緻	良好	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ、ナデ	外面上部に刺突文。	21
第17図 19	10	SD3	青：碗	器高：(5.3)	素：灰白色 釉：緑灰色	精緻	良好	ロクロ水引き	外面に草花文。	16
第17図 20	.	SD4	土：把手	残存長：8.5	橙色	砂粒を含む	良好	ナデ		5
第17図 21	.	SD4	瓦：鍋	残存高：7.1	内外：褐灰色	砂粒を含む	良好	内：回転ナデ 外ケズリ 凸帯部：ヨコナデ	外面下半は灰かぶり。	6
第17図 22	.	SD4	土：鍋	口：(28.6) 器高：(5.7)	内：黒色 外：鈍い褐色	砂粒を含む	良好	内：ハケメ 外：ヨコナデ	外面に煤付着。	20
第17図 23	.	SD4	土：皿	底径：7.8 器高：(1.0)	内：淡黄橙色 外：灰白色	砂粒を含む	良好	内外：回転ナデ 外底：糸切り		1
第17図 24	.	SD8	須：壺	器高：(3.8)	内：褐灰色 外：黒褐色	砂粒を含む	良好	内：回転ナデ 外：回転ヘラケズリ		SD5 1
第17図 25	.	SD8	須：壺	器高：(2.4)	内：褐灰色 外：鈍い赤褐色	砂粒を含む	良好	内外：回転ナデ		SD5 2
第17図 26	.	SD8	瓦：鉢	口：(29.4) 器高：(4.4)	内外：褐灰色	砂粒を含む	良好	内外：回転ナデ		SD5 3
第17図 27	.	SD8	青：碗	残存長：4.4	素：灰白色 釉：緑灰色	精緻	良好	ロクロ水引き	外面に鎬有。	SD5 4
第17図 28	.	SD7	磁：壺	口：(7.4) 器高：(3.0)	素：灰白色 釉：鈍い黄褐色	精緻	良好	ロクロ水引き		7
第17図 29	11	SD7	磁：仏飯具	底径：4.7 器高：3.0	素：淡黄橙色 釉：褐色	精緻	良好	ロクロ水引き		9
第17図 30	11	SD7	白：紅皿	口：(4.6) 高台：(2.5) 器高：(1.3)	素：灰白色 釉：白色	精緻	良好	型押し成型		4
第17図 31	11	SD7	磁：瓶	高台：8.0 器高：(15.7)	素：灰白色 釉：透明釉	精緻	良好	ロクロ水引き	外面に草花文。	6
第17図 32	11	SD8	青：碗	高台：(5.8) 器高：(2.8)	素：灰白色 釉：緑灰色	精緻	良好	ロクロ水引き		1
第17図 33	11	SD8	青：碗	高台：(6.0) 器高：(1.8)	素：灰白色 釉：緑灰色	精緻	良好	ロクロ水引き		2
第17図 34	.	SD10	瓦：すり鉢	口：(34.0) 器高：(7.0)	内：黄灰色 外：褐灰色	砂粒を含む	良好	内：ハケメ→すり目 外：ヨコナデ、ハケメ		3

第17図 35		SD10	瓦:火鉢把手	残存長:4.5	暗灰黄色	砂粒を含む	良好	ナデ		2
第17図 36	12	SD15	白:碗	口:(17.8) 器高:(3.4)	素:浅黄橙色 釉:白色	精緻	良好	ロクロ水引き	内面、蛇の目剥ぎ。	3
第17図 37	12	SD15	磁:碗	口:(14.0) 器高:(2.5)	素:乳白色 釉:透明釉	精緻	良好	ロクロ水引き	内面に文様有。	4
第17図 38	12	SD15	磁:碗	高台:(3.8) 器高:(4.7)	素:白色 釉:褐色	精緻	良好	ロクロ水引き	内面に文様有。	2
第17図 39	12	SD15	磁:碗	口:(8.8) 器高:(5.5)	素:白灰色 釉:透明釉	精緻	良好	ロクロ水引き	外面に草花文。	1
第17図 40		SD16	青:碗	高台:(5.0) 器高:(2.2)	素:灰白色 釉:オリーブ色	精緻	良好	ロクロ水引き		1
第17図 41		SD16	瓦:すり鉢	器高:(5.5)	内:鈍い黄橙色 外:褐灰色	砂粒を含む	良好	内:ハケメ→すり目 外:ハケメ→ナデ		2
第17図 42	12	SD18	土:灯明皿	口:(9.2) 底径:(7.6) 器高:(1.3)	内外:橙色	砂粒を含む	良好	内外:回転ナデ 外底:糸切り	内面の一部に煤付着。	1
第18図 1	13	SD17	磁:すり鉢	高台:(12.0) 器高:(7.5)	素:橙色 釉:鉄釉	精緻	良好	ロクロ水引き 内面:すり目		3
第18図 2	13	SD17	磁:すり鉢	高台:(13.0) 器高:(5.2)	内:暗赤灰色 外:灰赤色	精緻	良好	ロクロ水引き 内面:すり目		4
第18図 3	12	SD17	磁:碗	口:(11.0) 器高:(5.6)	素:灰白色 釉:灰白色	精緻	良好	ロクロ水引き	外面に文様有。 内面、蛇の目剥ぎ。	1
第18図 4	13	SD19	磁:碗	高台:(7.6) 器高:(4.0)	素:灰白色 釉:外　灰褐色 　　内　灰褐色 　　オリーブ色	精緻	良好	ロクロ水引き		4
第18図 5	13	SD25	陶:碗	口:(6.6) 高台:(2.4) 器高:(2.7)	素:白色 釉:白色	精緻	良好	ロクロ水引き	**高台側面に櫛歯文。**	1
第18図 6	14	SD25	磁:広東碗	高台:(7.2) 器高:(3.0)	素:白色 釉:白色	精緻	良好	ロクロ水引き	内外面に文様有。	3
第18図 7	13	SD25	磁:蓋	底径:3.0 天井部径:5.6 器高:(1.9)	素:赤褐色 釉:灰オリーブ色	砂粒を含む	良好	ロクロ水引き		6
第18図 8	14	SD25	磁:碗	高台:(5.4) 器高:(3.0)	素:灰白色 釉:白色	精緻	良好	ロクロ水引き	内外面に文様有。 内面、「寿」文有。	5
第18図 9	15	道路状遺構	青:碗	残存長:6.3	素:褐灰色 釉:緑灰色	精緻	良好	ロクロ水引き	内面に花草文。	2
第18図 10	15	道路状遺構	青:碗	残存長:5.2	素:褐灰色 釉:青緑色	精緻	良好	ロクロ水引き		1
第18図 11	14	表土剥ぎ	磁:碗	口:(10.2) 高台:(4.0) 器高:(5.0)	素:白色 釉:白色	精緻	良好	ロクロ水引き	外面に文様有。	1
第18図 12		SD2～SD4	磁:皿	高台:(7.6) 器高:(2.2)	素:白色 釉:透明釉	精緻	良好	ロクロ水引き		北東側切り合い部1
第18図 13	14	SD2～SD4	磁:皿	底径:(5.0) 器高:(2.5)	素:鈍い赤褐色 釉:透明釉	精緻	良好	ロクロ水引き		北東側切り合い部2
第18図 14		SD2～SD4	瓦:鉢	口:(25.0) 器高:(2.2)	内:淡黄橙色 外:灰白色	砂粒を含む	良好	内外:回転ナデ		北東側切り合い部3
第18図 15	11	SD3	土:五徳	残存長:12.0	表:鈍い橙色～黒褐色 裏:灰褐色	砂粒を含む	良好	表:工具ナデ 裏:工具ナデ　ナデ 底部:ヘラ切り		2
第18図 16	15	SD3	砥石	長軸:7.0 短軸:6.8 重量:120g					一面を砥石面として使用。 砂岩製。	イ1
第18図 17	15	道路状遺構	三稜尖頭器	長軸:3.7 短軸:1.2 重量:3.0g					チャート製。 波板状土坑からの出土。	イ1

図版

図版 1

①調査区全景（上空から）

②調査区上空から秋光川を臨む（上空から）

①８号溝全景（上空から）

②１号土坑　土層断面

③２号土坑　土層断面

④１号土坑　完掘

⑤２号土坑　完掘

図版３

①１・２号土坑　完掘

②３号土坑　土層断面・完掘

③４号土坑　土層断面

④４号土坑　完掘

⑤５号土坑　完掘

⑥６号土坑　完掘

⑦７号土坑　土層断面

⑧７号土坑　完掘

① 4・5・6・7 号土坑　完掘

② 8 号土坑　土層断面

③ 8 号土坑　完掘

④ 9 号土坑　土層断面

⑤ 9 号土坑　完掘

⑥ 10 号土坑　土層断面

⑦ 10 号土坑　完掘

⑧ 11 号土坑　土層断面

① 11 号土坑　完掘

② 12 号土坑　土層断面・完掘

③ 1 号道路状遺構　南壁土層断面

④ 1 号道路状遺構　北壁土層断面

⑤ 1 号道路状遺構　完掘

⑥ 1 号溝　完掘

⑦ 2・3・4 号溝土層 (b-b')

⑧ 2・3・4 号溝土層 (c-c')

①2・3・4号溝土層①

②2・3・4号溝土層②

③2・3・4号溝土層(d-d')

④2・3・4号溝　完掘

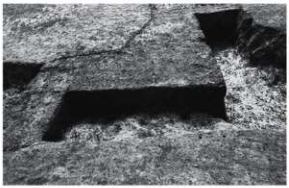
⑤8号溝　土層(g-g')

⑥8号溝　土層(l-l')

⑦8号溝　土層(SD8a-a')

⑧8・18号溝　土層(SD8c-c')

図版7



① 8・18 号溝　土層（SD8・18b-b'）

② 8 号溝　北東角　完掘

③ 8 号溝　南　完掘

④ 10・12・13 号溝　完掘

⑤ 14 号溝　土層（m-m'）

⑥ 15 号溝　土層（n-n'）

⑦ 15 号溝　完掘

⑧作業風景

① 18 号溝　土層 (o-o')

② 19・20 号溝　土層 (SD19・20a-a')

③ 19・20 号溝　完掘

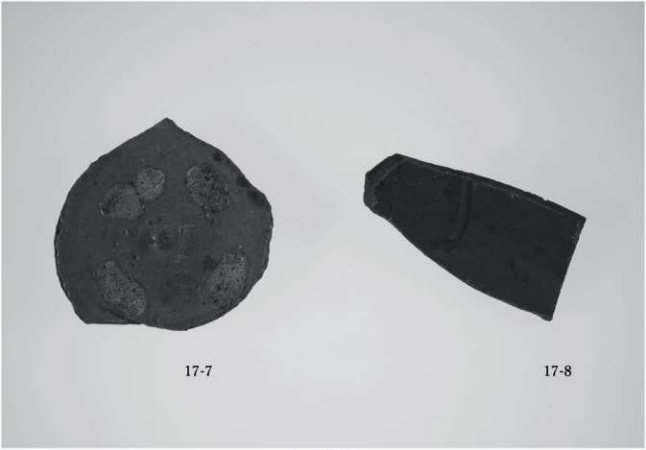
④ 21 号溝　土層 (p-p')

⑤ 24 号溝　土層 (q-q')

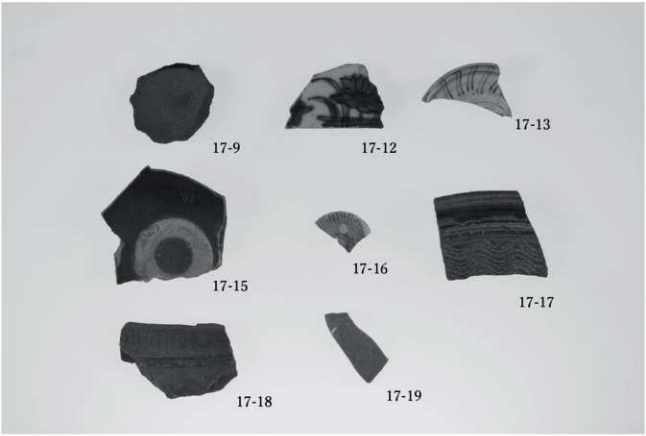
⑥ 21・24 号溝　完掘

⑦ 25 号溝　完掘

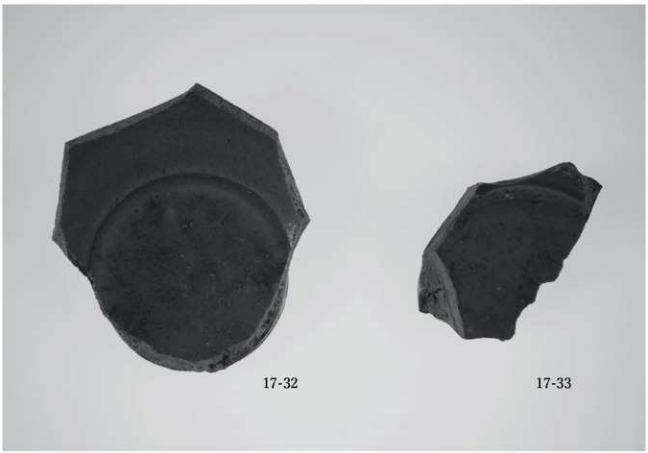
⑧作業風景



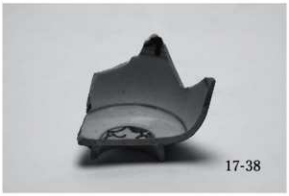
出土遺物①

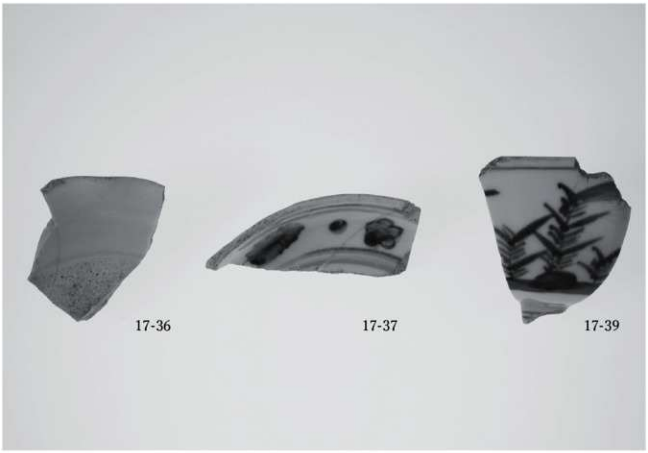


出土遺物②

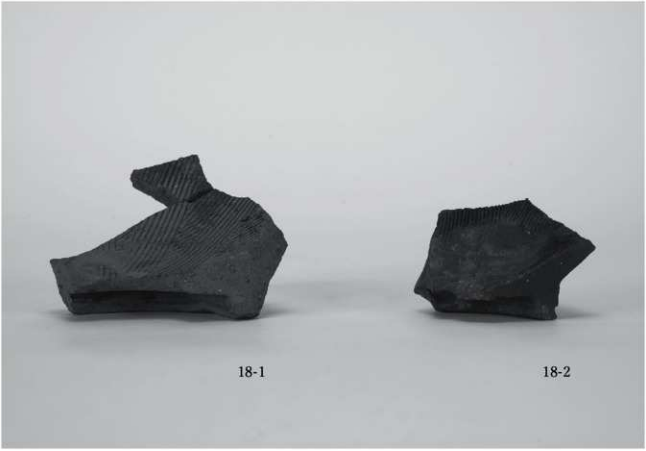


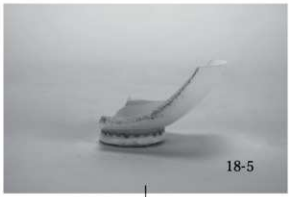
出土遺物③



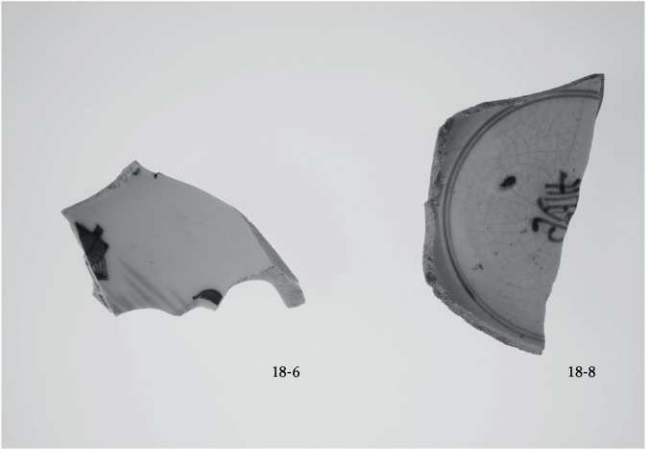


出土遺物④



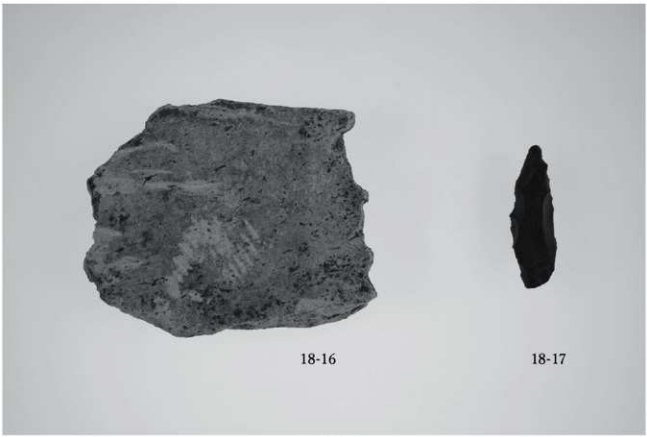


出土遺物⑤


18-6
18-8

18-11

18-13



出土遺物⑦

	報告書抄録
ふりがな	ふくどういしばしいせき
書名	福童石橋遺跡
副書名	福岡県小郡市福童所在遺跡の調査報告
巻次	
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 362 集
編著者名	髙橋　渉
編集機関	小郡市教育委員会　小郡市埋蔵文化財調査センター
所在位置	〒838-0106　福岡県小郡市三沢 5147-3　℡0942-75-7555
発行年月日	令和 6 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
福童石橋遺跡	福岡県 小郡市 福童	40216		33° 23′ 05″	130° 32′ 36″	2023.1.26 ～ 2023.3.31	5,320 ㎡	流通倉庫建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
福童石橋遺跡	集落	中世 近世	土坑 溝	土師器 陶磁器	

当遺跡は宝満川の支流秋光川の左岸低台地に位置する。本調査区が初めての調査であり、遺構は溝 22 条、土坑 12 基、道路状遺構 1 条を確認した。土坑の中には木棺墓と考えられる土坑を 3 基、井戸が 2 基含まれる。溝は東西に延びる溝を多く確認し、調査区の西側に流れる秋光川からの灌漑用の溝であると考えられる。また、北東隅では近代の道路状遺構を確認した。これらの溝や道路状遺構は明治 33 年の地籍図に書かれているものと考えられ、近代のこの地の生活の痕跡を解明することができた。

福童石橋遺跡

小郡市文化財調査報告書　第 362 集

―福岡県小郡市福童所在遺跡の調査報告―

令和 6 年 3 月 31 日

発行　小郡市教育委員会

小郡市小郡 255-1

出版　片山印刷

小郡市祇園 1-8-15

福童石橋遺跡　遺構配置図(S=1/200)